

【記念論文】

# 環境問題の歴史からみた 環境創造学の課題

——大東文化大学・最終講義——

土井幸平

## 目次

はじめに

1. 環境問題 200 年の構図
2. 地球環境問題への国連の取り組み
3. 環境創造学の理念と課題
4. 環境創造学の視点と方法

## はじめに

みなさん、おはようございます。

この階段教室いっぱいに出席いただきありがとうございます。ちょっと緊張しております。時間も制約されていますので、さっそく始めたいと思います。

今日の最終講義のタイトルは「環境問題の歴史からみた環境創造学の課題」です。

環境創造学の原点には環境問題があります。まず始めに、環境問題の歴史を頭に入れて置きたいと思います。今日の目次と、次のページの環境問題 200 年の構図という図式の両方を見ながら話を始めたいと思います。

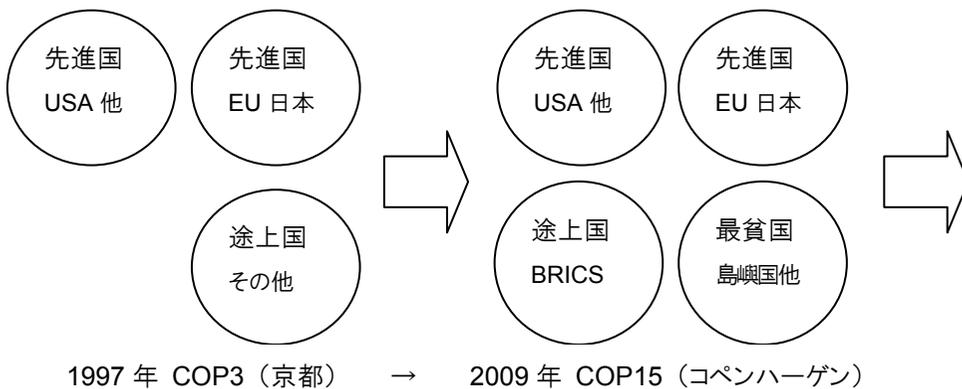
## 詳細目次

### 1. 環境問題 200 年の構図

- ・地球の歴史、46 億年
- ・人類の歴史、10 万年
- ・文明の歴史、8 千年
- ・近代の歴史、200 年
- ・環境問題の歴史、200 年

### 2. 地球環境問題への国連の取り組み

- ・1988 年、IPCC(気候変動国際科学者会議)設立  
(20 世紀に 0.6 度の温暖化発表)
- ・1992 年、地球サミット(リオ・サミット)、アジェンダ 21 採択、180 ヶ国  
魔法の言葉1 “Sustainable Development”  
魔法の言葉2 “Think Globally, Act Locally”
- ・2008 年、IPCC 第 4 次レポート(21 世紀に2度～4度、温暖化進行と予測)



- ・人類の長期目標は 2050 年、2050 年までに何ができるか。

### 3. 環境創造学の理念と課題

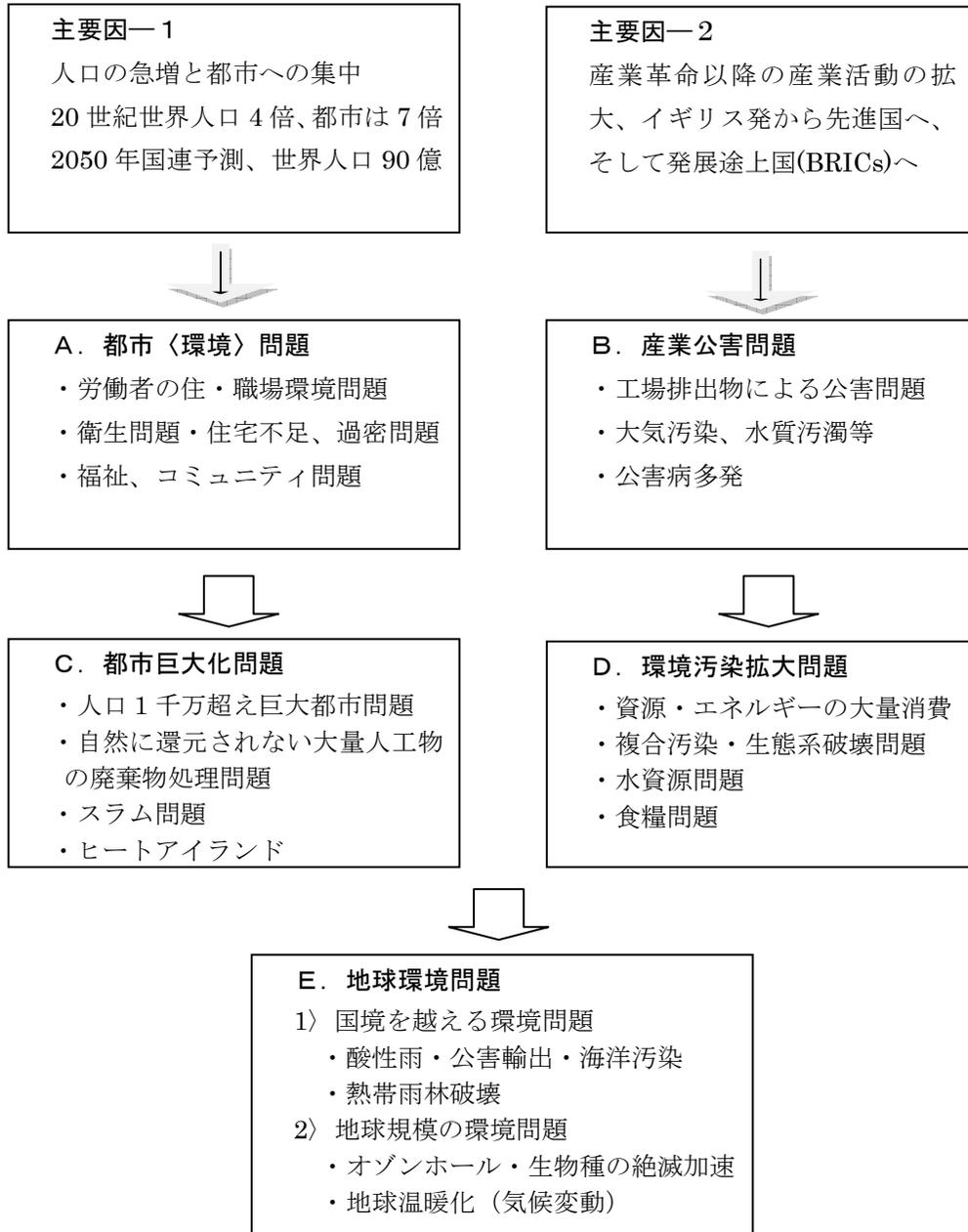
- ・2001 年環境創造学部誕生、魔法の言葉から生まれた学部
- ・環境創造学部の教育の目的(2008 年 9 月教授会)
- ・環境創造学部とはどんな学部か(環境創造入門講義パワーポイント)
- ・ユーザー(学生)の評価

### 4. 環境創造学の視点と方法

- ・環境創造めがね
- ・環境創造ポートフォリオ

図-1 環境問題 200 年の構図

〈近代の産業革命以来の環境問題の歴史は、2つの主要因と5つの局面があり、現在世界で平行して進んでいます〉



## 1 環境問題 200 年の構図

環境問題というのは、基本的には人間と自然との関係です。他の生物と違って、人間は自然に手を加えることで、発展してきたわけですが、自然に手を加えるという人間の行為が環境に問題を起こしてきたわけです。

地球の歴史は 46 億年、現生人類の歴史は 10 万年といわれています。それから古代文明、農業革命と合わせて世界の四大文明は 8000 年ぐらい前のことです。

これに対して、産業革命以降に資本主義、科学技術、社会科学の発達というものによって築かれた近代文明の歴史は、18 世紀イギリスの産業革命以降です。その近代文明が環境問題を引き起すのですが、イギリスの環境問題の歴史はおおよそ 200 年と考えてよいと思います。日本の産業革命は明治中後期ですから、日本の環境問題の歴史はおおよそ 120 年です。その道筋が、3 ページ目に私が書きました環境問題 200 年の構図（日本では 120 年）で、環境問題の歴史には 5 つの局面があるということを示しています。

近代の環境問題には二つの基本的な原因があります。一つは、19 世紀、20 世紀に人口が急増して、都市に集中したということ、もう一つは産業革命以降の産業活動の拡大です。

まず 1 番目の原因からみますと、人口増大と都市集中により衛生問題、住宅問題が発生し、都市の労働者に非常に悪い環境をもたらしました。これが A の都市問題です。2 番目の産業革命以降の産業活動の拡大は、B の産業公害問題を引き起こしました。これらの問題が深刻な社会問題になったのは、最初の産業革命地イギリスで 200 年、日本で大体 120 年ぐらいの歴史を持っています。

さらに、この A、B の問題はそれぞれ C と D の問題に発展します。C の問題は、都市が巨大化して起こす環境問題です。その結果、自然に還元されない大量の人工物が巨大都市に集積し、この大量の廃棄物を都市が処理できないという問題が発生しています。今後も増え続ける大量の廃棄物処理の問題はまだ人類が解決できていない環境問題です。巨大都市問題には、ヒートアイランド現象による環境問題もあります。

もう一つの D の問題は、環境汚染が複合的に拡大するという問題です。これはとくに世界全体で石油の消費が拡大した 20 世紀後半に拡大してきました。この C、D の環境問題はだいたい 50 年ぐらいの歴史です。

日本でも環境問題 120 年のうち、特に前半では A、B の問題、後半に入ると C、D の問題が深刻化して、これらの問題の解決にいろいろな手段で努力を重ねてきました。

私の専門の都市計画という学問は、A の問題から始まり、とくに都市にいろいろな問題が起こって、衛生問題を解決するために下水道を造ったり、あるいは住宅問題を解決するためにニュータウンを作ったりしてきたわけです。都市計画という学問はどちらかといえば、左側の A→C 系列の方向で発展してきました。環境問題が発生すると、それを解決していくためのいろいろな科学技術、あるいは社会科学が発達していくわけです。

右側の C、D という問題については、とくに水俣病とかイタイイタイ病などの公害問題では、日本は世界的に見てもっとも悲痛、悲惨な問題状況を引き起こしてきました。その経験への対応を踏まえて、技術面での解決策に加えて、公害対策基本法、環境基本法などの政策面での解決努力が行われてきました。

この図式が一番下に位置する E の地球環境問題は、ここ 20 年のことです。

地球環境問題は、最初は酸性雨、海洋汚染など国境を越える環境問題を関係国で国際的に解決すべき問題として、そしてさらにオゾンホールや地球温暖化問題、生物多様性問題などの地球規模の人類全体が取り組むべき環境問題として現れてきているのです。

この図式のように、世界のあるいは日本の環境問題の歴史は、5 つの局面の進展としてとらえることが出来ます。また、環境問題の 5 つの局面は、歴史的には時間を追って進展してきましたが、国や地域という空間的にはこの 5 つが同時に進行しているのです。先進国では、A 問題や B 問題は改善が進んでいますが、途上国ではまだまだ深刻な環境問題です。人口 1000 万人以上を巨大都市とすると、20 世紀には 10 都市程度でしたが、21 世紀には 30 都市が生まれます。巨大都市の環境問題にどう取り組むかは 21 世紀人類の課題です。

問題の進展に合わせて、人類の生んだ自然科学と社会科学は問題解決努力を積み重ねてきました。私たちの環境創造学は、その延長上にあると思います。

## 2 地球環境問題への国連の取り組み

さて、現在一番の環境問題である地球温暖化問題への取り組みは、1 ページの目次の図式にありますように、基本的には 1988 年の IPCC の警告から始まります。1988 年に世界の科学者が集まって 20 世紀に 0.6 度気温が上昇するという温暖化の警告、今後の気候変動を予測した報告がありました。

科学者の警告に対し、1992 年ブラジルのリオデジャネイロに世界中から 180 カ国を集めた国際会議、国連による地球サミットが開かれ、温暖化対策を話し合い

ました。

ただ、集まった 180 カ国は国によって利害がマチマチです。経済先進国もあれば後進国もあり、資源がある国もあればない国もあります。温暖化によって被害を受けるのは南半球の国が中心です。これに対して、北半球の国、ロシアやカナダは温暖化すればまずいというわけでは必ずしもありません。温暖化すれば、凍土地帯のシベリアに農地を拡大できるというメリットもあるわけです。

そのように利害がばらばらである国々が 1992 年に集まって、なぜ一つになれたのか。ここには二つの魔法の言葉がありました。世界中の人々がこの魔法にかけられて、一緒にやらなくてはならないということになりました。

その一つの言葉が「Sustainable Development」、つまり持続可能な発展ということです。それは基本的には、「経済と環境は両立する」というメッセージです。

もう一つは「Think Globally, Act locally」という言葉です。それは地球全体のことを考えなくてはならないけれども、実際の行動は自分たちの現場でやろうということです。最初は 180 カ国の一つ一つの国でしっかり行動しようという意味だったのでしょうが、「アジェンダ 21」という 1992 年のリオ・サミットの際に採択された文書の中では、「ローカリー」というのは、都市というかご近所というか、それぞれの地域社会で頑張るという意味だと理解されるようになりました。

この二つの言葉が「世界はひとつになれ」という魔法をかけたというのが現代の状況です。そして環境創造学も環境創造学部も、基本的にはこの二つの言葉から生まれていると考えてよいと思います。

お手元の目次には、丸が三つと四つの図式があります。これは COP3 と COP15 です。1997 年に京都で行われた COP3（第 3 回気候変動枠組条約締結国会議）は 180 カ国、2009 年 12 月にコペンハーゲンで開催された COP15 は 190 カ国という、世界中の国が集まって行われました。

京都議定書が生まれた COP3 の場合は、先進国と途上国が一つになって議定書をまとめようとしたところ、先進国の中でアメリカとカナダが離脱し議定書の成立が危ぶまれたのですが、2005 年にロシアが賛成にまわって、議定書が発効したという経緯があります。

今回の COP15、先月 12 月にコペンハーゲンで開かれた会議はまとまりませんでした。なぜまとまらなかったかという、先進国の内でアメリカが中心となって、中国やインドやブラジルなど、いま CO<sub>2</sub> をどんどん出している発展途上国（新興国）が加わっていない議定書には参加できないという立場をとりました。ヨーロッパと日本を中心とする先進国が非常に努力しましたが、結局まとまりませんでした。ただし、最貧国とか島嶼国とか呼ばれている国々、もう今にも海に沈む

かもしれないという被害、あるいは早魃で食糧問題に発展するかもしれないというアフリカの貧しい国の立場に対して、世界中で応援しようという内容は合意されました。さらに将来どうするかに対しては、次の節目は 2050 年です。今から 40 年先に人類としては CO<sub>2</sub> を現在より半減させるという目標が共有されました。

ただし全体で半減ということですから、日本や EU などの先進国は 80%削減という内容になっています。

ということは、2050 年は学生の皆さんが 60 歳になるときです。これからあなたたちの人生は、2050 年に向かっていかに環境問題を解決し、あるいは国際的な協調の中でやっていくかという渦中にある、そういう責任をこれから社会に出て果たしていかなければなりません。

そのときに環境創造学をどのように学んでいくかということが、後半のテーマです。

これまでの前半の話は、環境問題の歴史ということで、200 年に二つの要因があり、5つの局面として進展してきたということでした。

5つの局面は現在、世界で同時に併存しています。日本や EU は、どちらかいうと ABCD の問題は解決してきましたが、これから経済が発展していく国や最貧国では、ABCD の問題が同時に起こって来るわけです。

世界中には、いろいろな公害の問題があります。いま 1000 万人クラスの都市を巨大都市といいます。巨大都市は現在 12~13 ぐらいですが、2050 年にはおそらく 30 ぐらいに増えています。最近では、経済発展の続くアジアの大都市で大気汚染が深刻になっています。東京はだいぶ乗り越えてきましたが、環境問題の 5つの局面が世界中で併存しているという状況があります。それに対して日本はある程度進んだ環境技術、あるいは環境問題解決の社会政策を提供していく先頭に立って進むべき立場にあるわけです。

ただ日本も、都市問題が解決されたかということ、そうではないのです。たとえば日本では、住宅はたくさん余っていますが、他方でホームレスの問題とか年末の派遣村の問題があります。皆さん住宅に困っておられるわけですが、一方で住宅は余っている。そういう問題の解決は社会経済政策による解決が重要になるわけです。

したがって、この 5つの図式の左側の都市問題に関わることも、右側の産業公害や環境汚染の問題も、自然科学的な解決だけで解決できる問題ではなく、社会科学的な解決策も重要です。このことをぜひ皆さんは、環境創造学部で学んで下さい。

### 3 環境創造学の理念と課題

環境創造学部がどういう理念、目的の下に出発をして、どういう課題を抱えているかということをお話ししたいと思います。次をご覧ください。

#### イ. 「環境創造学部の教育の目的」(2008年9月教授会決定)

“ 環境創造学部は、主として社会科学的な視点から、地球および人間の環境に関する知識と手法を伝授し、その課題の発見と解決に創造的・実践的に取り組める人材を養成することを目的とする。 ”

環境創造学教育の目的であり、理念の一端を示したものです。

次に、2008年の環境創造学部の1年生に話したことから紹介します(2008年度環境創造入門講義パワーポイントから)。その骨子は次のとおりです。

#### ロ. 環境創造学部とはどんな学部か。(2008年度環境創造入門講義パワーポイントから)

- ・環境を広く学ぶ。(理系から文系にわたる新領域)
- ・主として、社会科学からアプローチする。
- ・三つのコースから入る。(環境マネジメント、福祉環境、都市環境)
- ・現場を体験し学ぶ多彩なカリキュラム。
- ・「環境創造的人材」=社会の現場で積極的に活躍できる人材。

このパワーポイントは、新入生に向けて「環境創造学部とはどんな学部か」を説明するために作りました。現在、1期生から5期生までが社会に出て、6期生から9期生までが在学しています。私が直接教えることになった学生はこの1期生から9期生までです。

1000人以上の学生に教えることになりました。

環境創造というのは、他学部の人からや社会に出てから、「どんな勉強をしてきたの?」というような質問をされることが多いようです。「環境といえば、ふつう理系の学部ではないの?」といわれますが、この学部は、「社会科学に関する知識を総合的に学んで糸口を見つけます」、「一つの学問、専門から解決が生まれるのではなくて、社会科学と自然科学との連携が必要です」とか、「教育で考えるだけでは具体的な解決が見えないので、フィールドワークを重視しましょう」、あるいは「現場をとおしていろいろな人たちとコミュニケーションを深めながら勉強し

ましよう」ということで、現場を体験するいろいろなカリキュラムが設けられています。

板橋区との連携による「環境創造講座」や「内外まちづくり研修」、あるいは「インターンシップ・ボランティア」など学外との交流で学ぶカリキュラムをパワーポイントのスライドで紹介しましょう。

これは白山先生のマレーシア研修で、熱帯雨林の破壊されている状況を、現地の海外協力隊員の人たちに案内してもらって体験しているところです(写真1,2)。

これは帰山先生の福祉研修で、日本でも一番過疎地域へ足を運んで、限界集落と呼ばれる所でどういう社会問題が起きているかを、こういう家に寝泊まりしながら研修しています(写真3,4)。

写真 1, 2 熱帯雨林研修



写真 3, 4 過疎地福祉研修



これはなかい環創堂で、中板橋商店街の中に拠点をつくり商店街を活性化するための活動を行っています(写真4, 5, 6)。

これは6月ときがわ町での田植え体験です。10月には稲の刈り取りにいきます。新入生へのパワーポイントで紹介してから、参加する学生が増えました(写真7, 8)。

写真 4, 5, 6 なかい環創堂



写真 7, 8 田植え体験



最初の内外まちづくり研修では、九州の屋久島、水俣、北九州を訪れました。これは屋久島の縄文杉です。水俣では、語り部と呼ばれる水俣病の患者の方から、当時の体験を聞いて、真剣な顔をしています。有機水銀で汚染された水俣湾は、

写真 9 屋久島縄文杉に会う



写真 10 水俣 語り部の話を聞く



写真 11 水俣湾



写真 12, 13 ライデン大学交流



今は埋め立てられて埋立地になっています (写真 9, 10, 11)。

次の年は、環境先進地のヨーロッパのライン川流域研修に出かけました。ライン川は、スイスが上流、オランダが下流という国際河川です。国際的な公害問題、スイスの化学工業が汚染を下流のドイツ、オランダに流したという問題や、原発立地反対運動がありました。このときは、オランダのライデン大学の学生たちとの交流が実現し、向こうの学生たちの家にホームステイをしました (写真 12, 13)。農家に民宿した年もありました。

環境創造学部は高島平再生プロジェクトにも取り組んできました。学生が 30 名近く団地に居住して、地域でいろいろなボランティア活動をしています。いろいろなタイプの住宅もあるし、高齢化が進んでいるという問題があるのですが、とても環境のよい住みやすい団地です。右側が 1DK、左側が 2DK、それぞれ学生が 2 人で一部屋をシェアし、1 人でも住んでいます。これは 2007 年 6 月に行われた福島先生の膝イタ体操講座です (写真 14, 15)。

写真 14, 15 膝イタ体操講座



もう一つ、エコキャンパス委員会という活動が私にとって印象が強いのです。エコキャンパスレポートを作りました。その中に 2 期生の学生たちが当時の東松山キャンパスごみ問題に着目し、キャンパス全体のごみの分布図を作って、こんなひどい状況だということをアピールし、そこから東松山のごみ分別が始まり、今のエコキャンパス運動につながっていることが書かれています (資料)。

これは、東松山で今の 3 年生のエコキャンパス委員会の連中が行っている活動です。ビニール傘をリサイクルする活動、灰皿をフラワーポットに活用しています。後輩たちがこういう活動を続けてくれているということを非常に頼もしく思っています。いずれにしても学生たちが自分たちで環境活動を一生懸命にやっているということです。

(資料)

エコキャンパス委員会のあゆみ

## 東松山ゴミ分別システムの改善 「プロジェクトD」の挑戦

## ◇経緯

2003年当時の東松山校舎ゴミ箱の状況は、種類分け、分別ともに散々たる状況でした。マナーの問題もありますが、ゴミ箱が1つの場所に1つしかなく分別できないこともありました。

『この現状を私達の手で何とか改善しよう。どこでも分別して捨てられる環境を創ろう。』と、ある学生のレポートをきっかけに4人の挑戦「プロジェクトD」が始まりました。

(写真1・蛭川伝説)



## ◇活動内容

まず始めに何をどう始めたらよいか分からず、放課後毎日集まって4人で話し合いました。そこで学内の状況を把握する為に、歩き回ってゴミ箱状態をチェックしました(写真2)。大学関係者、職員、清掃業者、ゴミ処理工場の方まで色々な人に協力して頂き、周囲の友達にも声を掛け、同士が10人加わり活動をしました。

もっとたくさんの人に活動を知ってもらうために、オリジナルビデオを撮って分別を呼びかけました。その甲斐あって現在、東松山校舎の各ゴミ箱は4分別して捨てられる環境が整っています。(写真3)

そして「プロジェクトD」の活動をきっかけに発足したエコキャンパス東松山学生委員会は、キャンパス内にてゴミ拾いの実施や大東祭におけるゴミの収集、分別を行いました。大東祭でのゴミの収集を行うまでには大東祭実行委員会との意見のすれ違いが何度もありましたが、私たちの活動を理解して頂き共同で活動しています。

これらの活動を通してゴミは分別して出す事で資源となり得ること、分別せずに捨てると様々な弊害を引き起こしてしまう事を学びました。もっと多くの人にゴミ分別の大切さを知って、分別のマナー向上に役立ててもらいたいです。ゴミ分別を更に進めましょう！！



(写真2・ゴミ分別分布図)



(写真3・プロジェクトD伝説)

さて、これまでお話ししたイとロは、主に教員側が考えていることです。一方で、環境創造学部で教育を受けている学生側は何を考えているのか。次のハとニは、環境創造学部に対する学生たちの評価です。

ハ. 2008年度環境創造フォーラム「環境創造学とは何か — 私はこう考える」(2008年12月)での、学部卒業生、在学生からの評価。

- ① 座学のみでなく、社会の現場に出て学ぶチャンスに恵まれたこと。
- ② 入学当初抱いていた狭い環境のイメージが、学年が進むにしたがって人間全体を包む環境のイメージに広がったこと。  
などの長所が指摘される一方、
- ③ 扱う分野が広すぎて、何から学べばよいか分りにくい。
- ④ 知識は増えるが、自分の関心を深められない。  
などの問題点も指摘された。さらに、次の言及があった。
- ⑤ ゼミの先生はそれぞれ専門がある。しかし、学部のゼミ生はその専門を進めないという問題がある。
- ⑥ 学部生の進むべき道は、少なくとも二つの専門(視点)から環境を理解できるという道ではないか。

ニ. 環境学部教育についての3年ゼミでの議論から。(悩み、不安の発言集。)

- ① 漠然と学んでいる感覚で、どういう将来になるのか、分らない。
- ② 社会に出たとき、学部で学んでいることがどう生きてくるのか。
- ③ 何を学んでいるか、分らない。環境と関係のない授業が多すぎる。
- ④ 経済学部との重なりが多いが、中途半端である。
- ⑤ 1年で受けた情報教育、2年から全然やらない。
- ⑥ 2年でコースに分かれるが、専門の授業は3年で本格化する。1, 2年から専門を増やせないか?
- ⑦ 1, 2年のとき、環境創造で何をやっているか、と聞かれて答えられない。
- ⑧ 環境創造の定義が分らない。
- ⑨ 1, 2年で広く学び、3, 4年でしぼるという履修展開がよいのではないか?
- ⑩ 履修登録を前、後期に分けられないか?

ハは、2008年12月の環境創造フォーラム「環境創造学とは何か — 私はこう考える」のディスカッションに参加してくれた卒業生や在学生からの評価です。その評価では、環境創造学部は、「座学のみでなく、社会の現場に出て学ぶチャンスに恵まれていた」とか、「入学当初抱いていた狭い環境のイメージが、学年が進

むにしたがって人間全体を包む広い環境のイメージに広がっていった」といった長所が指摘されました。その一方で、「扱う分野が広すぎて、何から学べばよいかわかりにくい」とか、「知識は増えるが、自分の関心を深められない」などの問題点も指摘されました。さらに、次の言及があって、学生に非常に教えられました。

「ゼミの先生はそれぞれ専門がある。しかし、学部のゼミ生は先生の専門を進めていくことができないという問題がある」、「学部生の進むべき道は、少なくとも二つの専門（視点）から環境を理解できるという道ではないか」、そういう勉強をしっかりとやりたいというものです。

それから二は、最近私のゼミで環境創造学部教育を受けて、どういう悩みがあるかについて自由に発言してもらったら、次から次へ出てきまして、それをまとめたものです。

環境創造教育を受けて学生側の不満や不安、評価の一端を示す意見です。これらの意見を受け止めて、カリキュラムや授業内容の改善を進める必要があります。

要するに、イトロは、こういう教育をしたいという教員側の思い、ハとニは、こういう教育を受けたいという学生側の評価です。そういうことを念頭におきながら、最後に「環境創造学の視点と方法」というお話をしたいと思います。

## 4 環境創造学の視点と方法

### 【環境創造めがね】

環境創造学の視点というのは、一つは社会科学的な視点ということです。もう一つは二つの専門の視点から複合的に学ぶという考え方が必要ではないかと思えます。この視点を私は「環境創造めがね」と呼んでいるのですが、環境創造学部で学ぶめがねが必要だということです。

### 【環境創造ポートフォリオ】

では、その視点に基づいてどういう勉強をするのかということが「環境創造ポートフォリオ」と書いたことです。つまり、問題発見・問題解決型学習、フィールドワーク学習を重視する環境創造学の学習効果を高めるため、1年生から3年生にいたる学習活動記録を綴じたものを作成するということです。

それは、自分が勉強したことを学習記録として綴じたものをつくってほしいということです。履修した主要な講義・研修科目において提出した中間・期末レポート、投稿した論文、読書した記録、町歩きレポートなどが、皆さんのUSBフラッシュメモリーの中に入っているはずで、USBに保存してあるそれを、時折取り出して、プリントアウトして、それに手を入れる、推敲して期末にレポート集

としてとりまとめる、そういうことです。

それからもう一つは、学習したレポートをできればパワーポイントとして作成し、他の人に発表するということです。多くの機会に発表するように努めると、それがいろいろな人とコミュニケーションするチャンネルになります。それも自分の USB の中に、レポートとパワーポイントが入ってきます。他者の目を通じて、随時パワーポイントに手を加えて、レポート内容やプレゼンテーションを洗練させる。そういう勉強をしていくことによって、次に何を学ぶか、あるいは卒業研究のテーマは何に設定するか、あるいは就職活動で「あなたは環境創造学部で何を勉強してきたの?」と聞かれたときに、その答えは、自分の USB の中に入っているのです。そういう勉強の仕方を「環境創造ポートフォリオ」と、私は名付けたいのです。

ポートフォリオとは、元来は手提げかばん、あるいは手持ち書類ケースという意味ですが、ふつうは絵描き志望の美術学生が自分の習作を持ち歩く容れもののことを指します。そういう学生は、自分の未完の習作を持ち歩いて、いろいろな先生・先輩・友人に見てもらったりしながら、先生たちからここはこう直せとか助言を受けたり、自分で考えてスケッチを直していくわけです。それがそれぞれの学生の作品に育っていくわけです。環境創造学部の卒業研究もほんとうはそういう形で育てていくとよいと思います。

そういう学習の方法を美術学生だけでなく、皆さんにも活用していただきたいと思います。幸いにして皆さんの世代からパソコン、情報の技術やパワーポイントの技術を身につけるようになってきているわけですから、それを活用した環境創造学習を提案したいと思います。というより、ぜひやっていただきたいと思います。

「環境創造めがね」や「環境創造ポートフォリオ」は、実は教育学習だけでなく、環境創造研究にもあてはまります。

私は都市計画が専門ですが、都市計画という専門に加えて、この大学に来て社会科学系の先生方と知り合いになって、社会科学的眼で環境政策の勉強をすることができました。この大東文化大学にきて、そういう二つの専門による環境創造めがねで環境を捉えることができたことは、私の人生にとって非常に幸いな、よい勉強になりました。その一つの結論が、最初に申し上げた「環境問題 200 年の構図」です。5つの局面で環境問題が進んでいるという構造的な問題を、私自身が納得できて、私が学んできた都市計画がその構図の中でどういう役割を果たしてきたのか、理解が進んだことがよかったと思います。それは大東文化大学の社会科学系の学問との付き合いということだけでなく、環境創造学部の各学年の学生に講義をして、その中で学生諸君とのやりとりから学んだことも多くありました。先生方や学生諸君に心より感謝しています。

今年定年になって、環境創造学の一線から退きますが、環境創造学部で学んだこと、私なりに納得したことを何らかの形で残したいとも考えています。

以上で私の最終講義を終わらせていただきます。ご静聴ありがとうございました。

## 土井幸平教授・略歴

1939年 大阪市生まれ  
 1944年～1958年 疎開先の神戸で育つ

### 学 歴

1962年 3月 東京大学工学部建築学科卒  
 1967年 3月 同大学院博士課程満期退学

### 職 歴

1967年 7月 株式会社都市計画設計研究所を設立  
 26年間全国各地の都市計画支援業務に従事  
 1993年 10月 大阪市立大学教授就任  
 工学部建築学科・環境都市工学科に10年間勤務  
 2001年 4月～5月 サンクトペテルブルグ大学に短期留学  
 2003年 4月 大東文化大学環境創造学部教授就任  
 学部では、「都市環境概論Ⅰ、Ⅱ」、「都市計画Ⅰ、Ⅱ」、「内外  
 まちづくり研修」、「環境創造ゼミⅠ、Ⅱ」などを担当。

### 専 攻

都市計画、都市政策。一級建築士、技術士（地方計画部門）、博士（工学）

### 主 著

新建築学大系第16巻 「都市計画」（編著） 彰国社 1981年  
 岩波講座現代都市政策第Ⅸ巻「都市の空間」（共著） 岩波書店 1973年  
 その他、著書・論文多数。

### 受 賞 他

1995年 「広島アジア大会選手村」基本設計により「ひろしま街づくりデザイン賞  
 大賞」  
 1995年 「都市基本計画策定における理念と実践」により日本都市計画学会論文賞  
 1995年～ 大阪にて阪神・淡路大震災に遭遇、復興支援活動に広く参加、兵庫県復興  
 10年検証委員会委員として「復興まちづくりの検証と提言」を担当。

### 社会活動

豊島区・埼玉県・大阪市・大阪府・高槻市・栗東市などの都市計画審議会、堺市住宅ま  
 ちづくり審議会、東京都建築審査会、板橋区景観計画策定審議会、いたばし総合ボラン  
 ティアセンター運営委員会など